

活動報告書～子どもゆめ基金助成金活動～

知って 学んで やってみよう 学校図書館でできること

知って 学んで やってみよう！

学校図書館でできること！読み聞かせ編

2017.12.2(土) 講師:赤木かん子氏 場所:市民活動支援センターにて

参加されたみなさんもそれぞれ思うことがたくさんあったかと思います。自然科学の分野のこと。調べ学習ができるようになるにはたくさん聞いていないとできないし言葉・語彙が増えないこと。面白いと思うことで、すぐ吸収するのが子どもで、面白くないものには反応しないこと。自分たちの文化をその年代の子たちが作って行くこと(16才にならないと自分たちのお話を書けないということ)。

今の子どもたちが言葉自体知らないということが驚きと、その理由が「大人に話しかけられてないんだよ」という話に驚きでした。確かに…と思いつくことも多く、子育てもスマホを見ていて、子どもを見ていないという話も耳にするこの頃。そして子どもは子どもっぽいのは見ないのだそうです。大人が思うよりずっと子どもは大人なのかも知れません。

言語習得期に多くの物と出会わせてあげることで、自分で読む力をつけて行くのだなと改めて感じました。本物を見せてあげたいというのは確かにと思います。

もっと読み聞かせについてもお話を聞きたかったと思いますが、近々読み聞かせについての本が出るとのこと。そちらの情報を楽しみに、また勉強の機会を作りたいと思います。(増川)



<午前 10:00～12:00>

「今の子ども文化と読み聞かせ」「自然科学の本の読み聞かせ」

・今の文科相が求めるのは社長になれる人材。ロボットが人間の仕事をできるようになるから、人間は新たなことを生み出せる能力を持たなければいけない。

・本物を見せることが大切。アンテナを立ててやる。

・スマホ世代の子どもたち 4年生以下生まれた時からスマホ。今の1年生は本に回帰している。思考は本にしかない、ネットは教えてくれないことを知っている。

・綺麗じゃないと見ない(今の子は生まれた時からハイビジョン)。

・昔の本でも感情移入できるものは聞ける。除雪車ケイティおぼさんの車だから感情移入できる。話を子どもっぽいと思うと見ない、聞かない。



・面白いと感じるものはなんでも吸収。つまらないものには感心さえ示さない。へーと思うことが大切。子どもが受け入れられるものなら聞ける。

・4、5、6歳の言語習得期は面白いと思ったものは覚え、つまらないものは覚えられない。

・定義を知っていればいい。説明できるし、わかる。3年生までに知識と概念を。

・本を読む子は知らない言葉を放っておくことを知っている。たくさん読むことで、言葉が繋がりと、言葉を習得していく。文学的な子は全体の3%の子どもに過ぎない。その他はリアル系。説明文の文体はわかるが、小説は論理的。手ほどきを受けないと読めるようにならないので中2以上になって自分で読めるようになる。

・いつどこで誰が何をしたら小さくてもわかる文体。口語体は思考に合わない。文章体で読むことができる。

・話をするなら一つのテーマで3分。1分のもを同じテーマで3つ集めるとかして工夫すると良い。

・大人は昔を知っているから戻れる。子どもは今しか知らない。

・ネット恐竜新聞新しい情報が載っている。本は学術的に認められないと作れない。本は証拠になる。ネットは証拠にならない。

<昼食交流会 12:00~13:00>

<午後 13:00~16:00>

・図書館を作るといふこと。情報を収集し、プールし、還元するところが図書館。生活、情報、趣味の本があること。文学ばかりの図書館はいけない。

・4類の分け方がポイント。子どもが変わると分け方も変わる。

・1年生で「もくじ、索引、百科事典の使い方」を知っていればOK。学年が上がるごとに定期的に「知っていると思うけど…引き方、調べ方を確認するね」と再確認することで知らなかった子やうろ覚えの子をフォローできる。

・集中してほぐしてでまた、聞くことができる。いっぱいになると聞けなくなる。

・日本人は著作権法にうとい。日本人は模倣し改良するのが得意だから、作ったものをまねしてもいいと思ってしまう。



主催：日光市読書ボランティア連絡会

National Institution For Youth Education
独立行政法人 国立青少年教育振興機構
「子どもゆめ基金助成活動」

体験の風を
おこそう